研究報告
ライフデザイン学研究 17
p.371-380（2021）

内丹呼吸法の名称の変遷に見る伝統文化の創出

Invention of traditional Neidan in Korea

木　内　　明*
KIUCHI Akira

要旨

韓国に「國仙道」と称される固有の内丹呼吸法が伝えられている。長い間、秘伝として山中でごく限られた者の間でのみ伝えられてきたというが、1960年代後半から一般の人々への指導を始め、現在では数万の会員を誇る大きな組織となっている。國仙道は、この50年の間に、「仙法」、「精神道法」、「正覚道」、「借力」、「パクトル法」など、様々な名称を名乗りながら現在にいたる。本稿では、この内丹呼吸法の名称の変遷をめぐって、文献記録や関係者らへのインタビューから、現代韓国において伝統的な健康法をめぐる社会文化的な状況を検証し、健康をめぐる文化がいかなる社会文化的な影響を受けながら営まれているのかを明らかにした。その上で、國仙道を例に、一つの文化が広く国民全体の共有する伝統文化として認められるための諸条件について論じた。

*東洋大学ライフデザイン学部健康スポーツ学科　Toyo Univ. Faculty of Human Life Design
連絡先：〒115-8650　東京都北区赤羽台1-7-11

韓国には、古来伝承される内丹呼吸法を今なお一般の人々に伝えている組織が存在する。人々は健康な身体の維持のため、あるいは、多忙な社会生活で疲弊しがちな心身を癒すためなど、様々な理由から市中にて施設を構える内丹呼吸法の修練に参加する。内丹という耳慣れない健康法ゆえに、馴染みの薄い日本人には奇異な印象ばかりが強調されるかもしれない。内丹呼吸法とは、下腹部に丹田の存在を想定した、いわゆる腹式呼吸の一つである。実践者の多さや、その目的などからすると、韓国人にとっては、ちょうど日本に定着したヨガのような健康法として受け止められているのではないだろうか。2000年代に至り、経済的に成熟した韓国社会を「ウェルビーイング」ブームが席巻した。人々は心身の健康にそれまで以上に関心を寄せるようになり、海外から流入した各種のヨガや瞑想法などとも競合しながら、いくつかの団体がこのような伝統的な呼吸法や瞑想法を伝えている。大きなところでは、韓国全土に数万人規模の会員を誇る団体も存在する。それらが分派し、時に会員の獲得などを競いながら、自らの技法や修練体系を発展させ、洗練の度合いや修練システムの効率化を深めている。

本論の考察の対象となるのは、韓国に伝わる内丹呼吸法の中でも最も広く知られた「國仙道」と称する一派である。現在、この呼吸法が韓国に古くから伝わる固有のものというイメージはある程度一般に共有されている。しかしながら、國仙道という名称も、わずか50年ほど前には存在せず、また、この50年の間にも幾度か名称を変えながら今に至っている。

同団体では、この呼吸法の名称について、歴史の中で次のように呼ばれていたと説いている。やや長い一文であるが、そのまま記したい。

「『三国史記』では「風月」、「風月主」、「風月徒」と呼び、『三国遺事（竹旨郎）』では、「風流徒」、「花郎」、「原花」と呼び、『朝廷花主之間』では「花主」、「花郎」、「花郎徒」、「花徒」、「香徒」、「國仙花郎」、「國仙」、「國仙徒」、「仙花」、「仙郎」、「仙徒」、「仙人」と呼び、後には、「実」、「核」、「造化道」、「気道」、「丹道」、「花郎道」などと呼び表してきたが、現在に至っては、「正覺道」、「仙丹」、「仙法」、「仙道法」、「國仙道」、「パクトル法」、「國伜道」と呼ぶようになった。」[1]

いずれも歴史文献の中に出てくる言葉ではあるが、それらが、現在の國仙道を指すことを裏付ける直接的な資料は、現在も使われている一部の名称を除き、存在しない。穿った見方をすれば、単に歴史上の仙思想を想起させるかのような名称を羅列しただけのようにも映る。とはいえ、それも営利団体の宣伝活動の一環であり、学術の枠外でのネーミング戦略だと理解すれば、必ずしも悪質とも言えない。選択的に使われたタイトルは、彼らが史実に目をつぶってまでも標榜したかった価値や意味を備えている、とも理解できる。

本論では、この内丹呼吸法が「國仙道」という現在の名称に落ち着くまでの変遷をたどりつつ、その名称に織り込まれた理念や時代的な背景、当事者たちの思惑等について精査する。その上で、その名称がもたらした社会的な効果や影響を考察したい。それらの究明が健康産業の社会文化的な側面を照射することになり、健康をとりまく文化現象がいかなる社会的影響を受けながら営まれているのか、その一端を明らかにできると思われるからである。

現代社会における内丹呼吸法のありよう

まず國仙道がいかなる内丹呼吸法であり、現在の韓国において、どのように伝えられているか概観したい。

韓国人が國仙道を学ぶ目的は様々であるが、國仙道自身が唱える謳い文句を見る限り、ヨガや瞑想法などと大差はなく、心身の健康と、それに立脚する豊かな生活という、やや抽象的な幸福の実現を目指してのことである。國仙道を始めた動機に関する2010年の調査[2]では「健康のため」が最も高く、次に「体力の向上」が続いている。つまり、現代社会において、多くの人々が求めてやまない健康の実現を一義的な目的としているのである。習うための属性や資格が問われることもなければ、特別な身体能力が求められる類の運動でもない。筆者が訪問した修練施設の参加者たちの姿からは、年齢層に特徴は見られず、若者から高齢者まで幅広い成人男女が各々の目的と関心から取り組んでいた[3]。

多くの場合、修練施設はヨガやスポーツジムと同じような街中のテナントビルの中にあり、出退勤の途中や、空き時間などを利用して行うのが一般的だ。入会した者は、普段着で立ち寄り、施設にあるロッカールームで定められた服装に着替えて行う。修練は呼吸法と瞑想、特殊なストレッチ体操が中心で、指導者の号令の下、おおよそ60分ほどのプログラムを実践する。

とかく、歴史上を遠い過去まで遡及することを誇る國仙道だが、現在のようなスタイルで一般の人々に指導を始めたのは1960年代後半のことである。それまで、この内丹呼吸法は秘伝として公開されず、ごくわずかな伝承者の間でのみ命脈を保ってきたという[4]。しかしながら、1967年に、後に青山仙師と称される高庚民がソウルに修練施設を開き、一般人を対象に指導を始めたことが契機となり、世の中に広まることとなった。閉ざされた人々の間でのみ伝えられてきたからか、それ以前の記録はほとんどなく、國仙道の来歴について、史実として裏付ける文献資料は存在しない。本論での考察も検証が可能な、高庚民が一般人に指導を開始してからの50年間を対象とする。

普及初期における名称の模索

先述したように、高庚民がソウルで最初にこの呼吸法を指導し始めた当初、まだ國仙道という名称は使用していなかった。上京後、数年間、市内のいくつかのビルを移りながら会員を募り、修練者が安定して増えてきた1970年に現在の本部があるソウルの中心部、チョンノに専用の修練所を構えることになった。その際の施設の名称が「精神道法修練院」である。ここでいう「精神」とは、中国医学でいう「精」「気」「神」の「精」と「神」のことである。國仙道なりにいろいろな説明を尽くしてはいるものの、どの物言いも凡そその範疇を超えるものではない[5]。「精」とは生命を維持するとされる根源的な物質のことで、「気」にも変化する生命エネルギーでもある。「神」には様々な理解があるが、同団体では、広く精神状態や表面に現れる意識のこととしている。つまり、中国医学において人間の心身の要とされる「精」と「神」を錬磨する呼吸法であることを、そのまま名称にしたのである。2年後の1972年、文教部[6]に非営利公益法人として登録された際の名称も「精神道法教育会」であった[7]。

1974年に高庚民がこの修練術について初めて著した『仙は生命の道－仙道法―』という書がある。現在、広く出回っている『國仙道』という書のベースになったもので、この呼吸法の基本的な内容は

この書の執筆に際して整理、確立されたと思われる。同書の中では指導する呼吸法に言及する際には「仙法」と呼んでいる。文脈を精査する限り、ここでいう「仙法」とは、國仙道の別称というよりも、呼吸法や、気を鍛える修練、あるいはそれによって獲得した力を指す一般的な名詞を以て言及されている。当然のことながら、韓国には道教の伝来とともに神仙思想も伝わっている。「仙法」という言葉から、人々はいわゆる仙人が操る特別な力や仙人になるための修練法のようなイメージを想起する。組織の規模もまだ小さかったこともあると思われる。少なくとも1974年時点では、名称も確定しないまま、神仙思想などを想起させる一般名詞でこと足りていたことがわかる。

当時、名称が曖昧だった背景には、國仙道なりの思惑もあった。普及を図る上で正式な名称とは別に、あえて名乗っていた通称もあったのだ。「借力」がそれで、大自然や宇宙、神の力を借りて、常人にはなしえないような特別な力を発揮する原理を表す言葉である。一般への普及を始めて間もない1970年ごろの韓国は、電気やガスなど、生活インフラの整備も途上であり、社会的に貧富の差も大きく、高度成長の波に乗り切れない貧しい人々も少なくなかった。当時を知る関係者によると、そのような状況下に、呼吸法や瞑想による心身の修練を訴えても人々の反応は乏しかったという。1969年にソウル運動場で「民族精神宣揚大会」なるイベントが開催されたことがあった。高庚民は丹田呼吸によって鍛えられた精神力や身体の強さを披露しようと、自身の周りに柵を巡らせ、それに火をつけてその中で７分間耐える荒業を試みた。ところが、その大会にやってきた他の出場者たちが腕力を誇る格闘家ばかりで、予想に反し、荒業を競い合うかのような大会になってしまった。高庚民の見せた力技は本来の狙いとは異なる形で高く評価されはしたが、はからずも、この大会を通じて彼の呼吸法の社会における現実的な需要のあり方を知ることになる。以後、呼吸法によって心身を養うといった健康や精神の修養を唱えることは控え、鍛えた格闘技や武術の力を誇示することで人々の耳目を集め、修練者を増やすことに舵を切ったのである。こうして「借力」という通称のもと、格闘術を前面に出して普及を進めた結果、國仙道は若い男性を中心に格闘術として会員を増やしていった。

「國仙道」の誕生

先述の『仙は生命の道―仙道法―』という書の中で「仙法」等とともに紹介されているのが「正覺道」という名称である。筆者も古くから修練していた師範らから、80年代には、まだ正覚道という名称の方が一般的であったという事実を確認している。また、キム・インゴンが1999年に著した『新たな千年を開く修練文化』においても、修練法の名称を正覚道と称していたことが語られている[8]。

正覚道は、現在に至っては國仙道の入門段階の基礎的な功法を指す名称になっている。当時は、入門した者すべてが初心者であり、基礎となる正覚道のみを指導していたために、この名称でこと足りていたとも考えられる。比較的若い師範の推測ではあるが、70年代も後半に至り、修練者の技術が深まるにつれ、より高度なレベルの修練法を指導する必要に迫られた。そのため、修練法の総称を國仙道とし、内容の体系化を図りながら、それまでの名称だった「正覺道」を最も基礎レベルの修練法の名称として位置づけ、その上位に通気法と仙道法という二つの上級ステージを設定したのではないかと推し量る。そして、1986年にいたって団体の名称も、「社団法人国仙道法研究会」と変更し、登録された[9]。

とはいえ、國仙道という名称がいつから使用され始めたのか、資料やインタビューから正確な時期を特定することはなお難しい。修練課程も未整備であった1970年代に、高庚民が新聞や雑誌でインタビューされている記事がいくつか残されている。彼が修練によって体得した呼吸法や、その不思議な力に関する特集記事のどこにも、國仙道という名称は存在しない。1974年と1976年に渡米し、現地でも様々な借力を披露しているが、それを報道する帰国後のインタビュー記事にも、やはり國仙道という言葉はない。先に挙げた1974年発刊の『仙は生命の道―仙道法―』初版本においても國仙道の文字が見られないのは同様である。ただし、ソウル市内の国立中央図書館に所蔵されている初版本の表紙を詳細に確認すると、表紙の「仙道法」の上に、あえて後から「國」の字を書いた紙を貼り付け、書名を『仙は生命の道―國仙道法―』と修正している。1977年に分派した大韓國仙道協会も、当初は「仙道」と称して修練指導を始め、1980年になって「仙道丹田修練」と改称し、1992年になって、ようやく「國仙道」を団体の名称として登録している[10]。これらの事実からすると、80年代の前半に國仙道という名称が考案され、その後、数年をかけて少しずつ浸透し、1986年の登録を以て正式名称になったことが推察される。

漢字のない名称とナショナリズム

1970年代には、漢字ではなく、ハングル文字からなる「パクトル法」という名称も創られている。高庚民の書中でも、「パクトル法」は國仙道の別称であり、指し示す技法に違いはないとされ[11]、國仙道関係者の間でも今なお使用されている。

「パクトル法」の「パク」とはハングルで**밝**と書く。「明るさ」を意味する言葉であり、國仙道では「太陽光」や「光明」「天」という意味で説明されている。

國仙道はこの「パクトル法」について、以下のように説明する。

「古来朝鮮民族は天を崇拝し、太陽、日、光明、天などをパクと呼んでは恐れ崇めてきた。先人たちがパクを恐れ崇めていたのは、その施す恩恵の大きさゆえであり、力の偉大さゆえでもあった。やがて、人々はそのパクを崇拝するだけでなく、自らの体内に取り入れる方法を創案するようになった。」[12]

「トル」はハングルで**돌**と書き、「回転」を意味する言葉でもある。國仙道は、大自然や宇宙が回る現象がこの「トル」で象徴され、「光」や「天」を表わす「パク」と、それが回る「トル」で「パクトル」だと説明する。つまり「パクトル法」とは「（宇宙の力である）光を回す術」という意味として解釈でき、大自然の力を自身の身体に巡らせる原理や構図をそのまま言葉にしたものである。ただし、修練を長く積んだ会員によると、この「パクトル」という言葉は、単なる理念にとどまらず、体感的に理解できる現象だという。実践者にとって「パク」は、「光」よりも、むしろ中国医学でいう「気」として実感され、修練を重ねることで、自身の身体の経絡を気がめぐる様子を身体感覚的に感知することができるようになるという。表現にこそ差はあるが、筆者はそのような個人的な経験を複数の修練者から直接に耳にした。つまり、実践者によっては、内丹呼吸法が目指す身体のありようを、気によって感得することで、この「パクトル」という言葉の理解が可能になるというのである。

ところで、この漢字を持たない名称は、なぜ創出されたのであろうか。この点について団体の書籍やサイトは等閑しているが、意図として考えられるのは、一つに韓国固有性の強調である。中国から伝えられた漢字がない名称を掲げることで、道教や神仙思想、中国医学などが伝わる以前から、この内丹呼吸法が韓国の地に存在していたという固有性を訴える仕組みである。

植民地時代に日本語を強要され、ハングルの使用を制限されたことで、戦後の韓国で、ハングルという文字は、それ自体がナショナリズムのシンボルと化していた事実があった。初代大統領であるイ・スンマン（李承晩）は、韓国固有の文字ではないという理由で漢字の使用自体を禁じている。1957年には「ハングル専用の積極推進に関する計画書」を発表し、その翌1958年には「ハングル専用実践要綱」を作って、各省庁の看板や文書等、より具体的な事例と共に、社会全体のハングルの徹底を図った。イ・スンマン失脚から３年後、1961年にクーデターを起こし、後に大統領になったパク・チョンヒ（朴正熙）もまたハングル化への姿勢は頑なだった。1962年に文教部内に「ハングル特別審議会」を設置すると、國仙道が普及を開始した翌1968年３月に「ハングル専用５カ年計画案」を、同年10月には「ハングル専用推進７項目」[13]を矢継ぎ早に発表した。さらに、同年11月には「ハングル専用研究委員会」[14]を設置し、強制的なハングル専用に拍車をかける。これにより、1970年、ついに教育現場からも漢字は一切姿を消すことになった。

折しも國仙道が名称を模索していたころの時代的な一側面が、まさにハングルがナショナリズムのシンボルと化し、漢字が社会から排斥されていたころであった。「正覺道」であれ「仙法」であり、漢字を有する名称であることに変わりはない。植民地経験の反動によるナショナリズムから固有の文化が評価された時代に、中国から伝えられたかのような印象を醸し出す漢字名称を名乗ることに、普及を広げる上での利点を見出し難かった可能性は否めない。あえて漢字を持たない名称の創出について、その古さと韓国の固有性を主張する一つの傍証としての役割を付与していた蓋然性は否定し難いだろう。

「人」と「天」が通じる理念の文字化

正確な日時を特定できないながらも、「國仙道」という名称が1980年代前半に作られたのはほぼ事実と見てよいだろう。では、なぜ新たに創出された名称が「國仙道」という３文字であったのか、この「國仙道」という名称に投影された当事者たちの思惑を検証したい。

「國仙道」の「國」については、近代的な枠組みである国家、つまり韓国を指し、この呼吸法が韓国の文化であることを示している、という解釈が一般的だろう。ところが、國仙道では「國」とは宇宙を指し、人を取り巻く環境全てを意味していると説明する[15]。韓国という特定の地域ではなく、人類にとっての普遍的な存在空間を意味するというきわめて広義な解釈である。しかしながら、一方で、師範や書籍によってこの呼吸法の修練術が韓国のみにて伝承されてきたことが強調されるあまり、一般の会員にとって「國」とは、事実上、韓国、あるいは北朝鮮の地域を含む半島のことだと受け止められている。

続く「仙」という文字は、國仙道がもっとも説明に重点を置く部分である。一般的に「仙」とは中国由来の神仙思想に象徴される言葉であり、「人」と大自然の象徴である「山」が一体となっている

ことを体現する文字である。道教においても人が神仙と化すことは禁欲的な修行の究極の目的の一つでもあった。神仙思想にまつわる文化が豊富な韓国においても「仙」という字義に変わりはない。この「仙」を韓国語で発音すると「선Seon」、あえて音をカタカナにするとソンとなる。「선Seon」（ソン）という言葉について、國仙道は独自の解釈を以て次のように説明する。

天を祭る祭主は、天と通じる神人でなければならず、そのような霊通者を固有のハングルで「サル・アン」と呼び、現在でも「サン」あるいは「サニ」と呼ぶ。つまり、「サン」とは「巫」のことである。「サン」という古語の音が、中国から来た「仙」という漢字の読みにあてられたのである。[16]

まず、天を祀る祭主が古くから存在し、その呼称である「サン」に、後世に中国から伝えられた「仙」という漢字が充てられたということである。つまり中国から道教が伝来する以前より、この地に内丹呼吸法の修練やその思想が存在していたという歴史的な古さと韓国の固有性が、あらためて「仙」という文字の解説過程で主張される。

「道」については、老子による「道」や、「養生之道」や「金丹之道」などの言葉と共にその文字の意味を解いている[17]。それらと道教との関りや、この修練に哲学的に深遠な思想があることを印象付けつつ、いかに独特の「道」であるかを説いてはいるが、一貫して字義は曖昧なまま明確に定義することはできていない。少なくとも筆者は、こと名称の「道」という文字に、生き方や哲学等を述べる際にしばしば付される「－道」という以上の意味や使い方は見出せない。

つまり、國仙道の唱える字義に従うと「國仙道」という名称は、「大宇宙における神と通じる道」というような意味ということになる。ところが、この名称は、もう一段階さらなる変化を遂げることとなった。

國仙道の団体のうち、高庚民の直系の組織を自認する二つでは、名称に「仙」という漢字を使用していない。「伜」という漢字を代用し「國伜道」と書き表す。この「伜」という漢字は、そもそも実在せず、國仙道が創出した、いわばオリジナルの創作漢字であり、同団体はこの「伜」に「仙」と同じ「선Seon」という音をあてている。この二つの漢字「仙」と「伜」の相違について、彼らは次のように説明する。

「仙とは、山に登り修練をする人を指し、山に住む人という意味で仙である。伜は人と天が相通ずることを意味している。」[18]

つまり「伜」は、人が天と通じ、人の身体が天の力を体得する様態を表しているという。「伜」という漢字を創出したのは、その呼吸法の修練が地上の山ではなく、それよりはるか上にある天と通じることを目指す境地をそのまま文字として表象しようとしてのことである。「伜」という漢字の創出経緯について、筆者は関係者から具体的な情報を採録することはできなかったが、先述した1974年に出版された『仙は生命の道』には一か所、「伜道住」という言葉が存在している。「伜道住」とは、國仙道が目指す理想の人間像を語る句[19]のタイトルであり、「天にある神の真理に人が住む」と解釈されている。しかしながら、同書の出版時点では「人と天が相通ずる」といった、漢字に織り込まれた思

想はどこにも説明されていない。

先にも挙げた1977年に分派した大韓國仙道協会では、今なお「仴」という字は使用せず、「仙」という字を以て「國仙道」と称している。袂を分けた時期が早かったため、「國仴道」どころか、「國仙道」すらなかったことは確かである。現在にいたっては、本来存在しない「仴」という漢字がロゴや商標である以上、他の法人では使用できないのも事実だろう。早い時期に独立した李判岩が設立した「太白山國仙道」という団体でもやはり「仙」のままである。

「仴」という漢字は、この団体の修練の理念や究極的な目標を表す文字として、國仙道という名称が創出されるよりも早い時期から存在していた。それが「仙」に代わって正式な名称になったのは、ことによると、80年代以降、分派した競合関係にある団体が増えたことにも関係があるのかもしれない。新興団体との差別化を図るべく、より高みを目指す究極的な理念を名前にも織り込んだ可能性も考えられる。

名称が描く「想像の共同体」

本論のまとめとして、結果的に辿り着いた「國仴道」の３文字が物語る名称創出の背景や狙いと、その３文字がもたらした影響について、考察に基づき整理したい。

同団体の修練に参加し、インタビューを重ねる中で実感するのは「國」という文字が持つ、韓国の固有性を印象付け、国民の愛国心に訴える力である。ベネディクト・アンダーソンは『想像の共同体』で、自分が何人である、というアイデンティティの拠り所として、共通のイメージや国家の枠組み、それを具現化した伝統文化のようなものが希求されることを論じている[20]。近代において、日本による植民地化によって国権を失い、韓国語をはじめ、様々な自文化を剥奪された韓国人にとって、固有の伝統文化に対する思いが弱いはずはなかった。植民地下において自らの文化的アイデンティティを否定された反動から、独立後には外国の文字ということで漢字すら禁じてしまったほどである。有史以来、常に圧倒的な文化パワーに溢れる中国文明の影響下に晒されて来たことや、今なお、北朝鮮と国土を二分している不安定な状況ゆえに、国家のありようや国家が寄って立つ伝統文化に対する憧憬は深く、戦後も国家の枠組み、あるいは国家の存在の正当性は常に強調されてきた。

それはそのまま文化行政にも表れる。高庚民がソウルで普及活動に従事するようになる５年前、1962年には文化財保護法が制定され、民俗芸能が国家によって保護されるようになった。そして1974年に始まった第一次文芸中興五か年計画における目標の一つこそ、自立経済、自主国防に基づく自主的民族文化の創製であった。近代化の過程で、あるいは、植民地支配の渦中に喪失した文化の回復が課題となっていた時期である。同計画は、植民地史観や外国文化に対する従属観念を払拭し、民族文化の再発見を通じて国民的自覚と誇りを宣揚しようとする文化行政であったのだ[21]。このような社会環境においては、自らの「國」の文化であることを訴える名称が、一般市民に一定の信頼感と安心感を与え、普及を後押しする力にもなった可能性は否定し難い。

師範や一般会員による語りからも、建国神話に登場する檀君や、新羅の花郎も國仙道を実践していた、というような話はしばしば語られた。同団体の書籍やウェブサイトにおいても、歴史上の偉人らが修練していたことは繰り返し誇示されている。

このような言説がまかり通り、受け入れられる背景の一つに、「國仗道」という名称がゼロからの創造ではなかったことも看過できない。この名称が80年代前半に考案されたとはいえ、それが韓国の歴史における初出というわけではない。「國仙」という二文字は、そもそも『三国遺事』に登場する。『三国遺事』の巻三「塔像」に出てくる「國仙」の意味については、一般的に文脈から「花郎の中から選ばれた代表」の役職だと解釈されている。この限りにおいて、國仙の「仙」に、神仙思想にまつわる意味は見出されない。しかも、その「國仙」という言葉の解釈すら、完全に定まっているわけでもない。「弥勒仙花」の「仙」が弥勒大聖を指すのと同様、國仙の「仙」も神仙ではなく、弥勒のことを指すとする説[22]さえもある。一般の韓国人にとって新羅時代の花郎という青年武士集団の存在は馴染み深いが、國仙などはなかなか関心の対象にならないのが普通だろう。そのあたりの歴史認識の間隙を國仙道が巧みに突いたようにも見える。その上で、「仗」という文字に置き換え、他者の手が及ばないオリジナルな仙文化と、それに根差した伝統的な呼吸法というストーリーを確立してしまった。

歴史を自らの都合に手繰り寄せて解釈し、自文化や自民族を過大に評価することが國仙道に限らないことは言うまでもない。そもそも、そこまで巧妙な目論見のもとに、この３文字を選択したのではなかったのかもしれない。しかしながら、「國仗道」という名称を含む印象の操作戦略は経営上の大きな成功と広い普及を後押しした。90年代以降、他の呼吸法や健康法を指導する団体とは軌を違え、ウェルビーイングブームの波にも乗り、韓国でも有数の規模の健康団体へと成長した。

伝統文化が、長い年月の中で培われた本質的な存在ばかりではなく、実は近代における社会や政治の様々な文脈の中で「創造」されたものもあることを明らかにしたのは、ボブズボウムであるが[23]、ここまでの論を顧みるに、「仗」という漢字、この「國仗道」という名称も「創造」されたといって差し支えあるまい。

実は、國仙道については、名称だけではなく修練する際の服装なども、特定の文化的な装飾が象徴的に施されている。普及を開始した当初は、普段着のまま行われ、特別な行事に際しては、空手や柔道のような武術の道着を着た。ところが、組織の拡大とともに、服装にも少しずつ手が加えられ、今となっては高句麗の壁画の絵、つまり韓国文化の古いモチーフを参考にデザインされた衣装に変わっている。

こうした國仙道が遂げた名称や衣装の変遷から、この呼吸法の変容について一つのパターンを読み解くことが可能になる。すなわち、國仙道は発展的に進化すればするほど、より古い、そして韓国的なイメージを自らの個性として新たに取り込みつつ洗練の度合いを増してきたのである。そうして、巧みに施された韓国文化や、それが放つ印象操作がさらに一般の修練者をして、歴史上の有名人も実践してきた韓国の伝統文化であるという解釈を共有させ、普及を後押しするという好循環が構築される。

國仙道はこの名称の創出によって当事者たちの文化から、国家の、あるいは国民全体の文化となるための条件整備の橋頭保を確保したといえよう。創出された名称は、古く由緒ある伝統文化を希求していた韓国人にとっては親和性が高く、受容も容易だった。それは、会員たちが、押しなべてこの呼吸法を韓国の古い文化だと認識していることからもうかがえた。こうした一連の國仙道の模索の過程を検証する限り、古い文化ほど正当性を評価されがちな社会において、既に文化的な正当性が合意され、自らの民族や国家等のアイデンティティとして認定されているある種の文化的権威に依拠して創られるほど、その文化は人々のナショナリズムやエスニシティに効果的に訴え、かつ真実性の認定を

後押しする、というサイクルが加速することが見て取れる。

ただ、國仙道が韓国という国民国家と、その共同体に属する人々が自らのアイデンティティの一つとして想い描く伝統文化としての位置を自らのものにしたかというと、今なお、当事者たちの期待ほどには認識されていない、と言わざるをえない。韓国の伝統文化を紹介する様々なメディアや書籍でも、國仙道が紹介されることはない。エビデンスに忠実な歴史学によって諮ればそれも自明のことで、國仙道が韓国固有の文化として国家的なお墨付きを得るのは、現時点においてはなお容易ではないだろう。それは、現在、多くの韓国人に伝統文化として認識されている、その他の各種文化との相違について比較、検証することで、より明確になるかと思われるが、今後の課題として別に論じたい。

1　青山伜篩『國伜道Ⅰ』図書出版國伜道、ソウル、p.63、2003（韓国語）
2　パク・フィギョン「中年女性の國仙道参与の動機と修練満足度に関する研究」修士論文、ハンソ大学2011（韓国語）
3　2009年から2019年にかけて、ソウル市内を中心に16か所の施設を訪問した。
4　青山伜篩『國伜道Ⅰ』図書出版國伜道、ソウル、p.37、2003（韓国語）
5　青山伜篩『國伜道Ⅰ』図書出版國伜道、ソウル、pp.151-162、2003（韓国語）
6　現在の教育部の前身。日本の文部科学省に相当する行政機関
7　社団法人國仙道「21世紀の新たな精神文明、國仙道の役割と使命」、國仙道創立30周年記念式典及び学術大会文集p.9、1997（韓国語）
8　青山巨篩『仙は生命の道―仙道法―』ソウル、1974（韓国語）
9　キム・インゴン、「韓国の修錬文化30年」、『新たな千年を開く修錬文化』、精神世界社、p.45、ソウル、1999（韓国語）
10　金性煥『徳堂國仙道丹田呼吸法』、ソウル、p.25、2004（韓国語）
11　青山伜篩『國伜道Ⅰ』図書出版國伜道、ソウル、p.25、2003（韓国語）
12　青山伜篩『國伜道Ⅰ』図書出版國伜道、ソウル、p.64、2003（韓国語）
13　７項目には、行政、立法、司法で扱うすべての文書や、学校で扱う教科書から漢字を一切なくすことが盛り込まれた。
14　同委員会では、教育用漢字としてかろうじて認められていた1300字も廃止された。
15　青山伜篩『國伜道Ⅰ』図書出版國伜道、ソウル、p.64、2003（韓国語）
16　青山伜篩『國伜道Ⅰ』図書出版國伜道、ソウル、p.63、2003（韓国語）
17　青山伜篩『國伜道Ⅰ』図書出版國伜道、ソウル、p.80、2003（韓国語）
18　社団法人國仙道「21世紀の新たな精神文明、國仙道の役割と使命」、國仙道創立30周年記念式典及び学術大会文集p.7、1997（韓国語）
19　正覚道源體智體能人天道一和救活倉生
20　ベネディクト・アンダーソン『定本 想像の共同体： ナショナリズムの起源と流行』、白石隆・白石さや訳、書籍工房早山、2007
21　呉洋烈「韓国の文化行政体制50年―構造及び機能の変遷過程とその課題」『文化政策論集』７。pp.42-48、1995（韓国語）
22　金煐泰「三国時代의 弥勒信仰」『韓国弥勒思想』、東国大学校仏教文化研究 院、1997、p.51
23　E・ホブズボウム（前川啓治訳）「伝統は創り出される」E・ホブズボウム・T・レンジャー編『創られた伝統』（前川啓治・梶原景昭他訳）、紀伊国屋書店、pp.9-28、1992

原稿受領2021年12月10日